

第3回 日本漢字能力検定 試験問題

氏名

準1級

解答は、現代仮名遣いによるものとする。

解答は別紙(答案用紙)に書くこと。

(一) 次の傍線部分の読みをひらがなで記せ。(30) 1〜20は音読み、21〜30は訓読みである。

- 1 奇妙なほど兩人の言い分が吻合する。
2 不壊の信心で己を鎧っていた。
3 庫裡の裏手に墓地が広がっていた。
4 この度の鶯遷慶賀の至りに存じます。
5 鰯雲を眺め家郷に在す萱堂を想う。
6 蓑笠の翁が雨中釣りを垂れておる。
7 人物を秤量するに資産の多寡を以てす。
8 乃公は迷うことなく割って入った。
9 諸生畦畝の慮を守り天下の義を知らず。
10 永年に亘る爾汝の交わりを嘉する。
11 人生の真実を瞥見した思いがする。
12 黛青の色濃き連山を望見する。
13 柴門を潜ると幽かな琴の音が聞こえた。
14 勅令の制定に内閣の輔弼を要した。
15 鹿茸を鼻にあてて嗅ぐべからず云云。
16 痛烈な駁論にぐうの音も出ない。
17 天仁三年庚寅怪星現れ天永と改元さる。
18 劫火が市街を余さず嘗め尽くした。
19 地所と道路との境界を劃定する。
20 是を以て美声溢誉其の実に過ぐる有り。

(二) 次の傍線部分は常用漢字である。その表外の読みをひらがなで記せ。(10)

- 1 人の稼ぎの零れを拾ってしのいだ。
2 故人は紛れも無く教師の鑑であった。
3 マカロニをマヨネーズで和える。
4 二人の関係について更めて考えてみる。
5 遜って頻りに己の才能を否定する。
6 外面とは大違いの初な学生だった。
7 日本列島の全域を普く踏査する。
8 頬にうっすらと紅が刷かれている。
9 仲秋の望の月に団子を供え薄を飾る。
10 陶芸を子供の泥遊びに准える。

(三) 次の熟語の読み(音読み)と、その語義にふさわしい訓読みを送りがなに注意してひらがなで記せ。(10)

〈例〉健勝……勝れる ↓ けんしょうす

- ア 1 叢雲…… 2 叢がる
イ 3 輯録…… 4 輯める
ウ 5 清穆…… 6 穆らぐ
エ 7 蕃蕪…… 8 蕃る
オ 9 牟利…… 10 牟る

(四) 次の各組の二文の()には共通する漢字が入る。その読みを後の□から選び、常用漢字(一字)で記せ。(10)

- 1 国政の(1)機に与る人物が疑われた。(1)密院の同意の下に戒厳令を布く
2 不(2)転の決意で修行に入る。革新勢力の(2)潮が著しい。
3 万策尽きて長大(3)を漏らす。財界のお偉方の(3)女を妻に迎える。
4 各国首脳が円(4)会議に集う。彼に並ぶ(4)識の士を知らない。
5 (5)百の職人を遥かに凌ぐ腕がある。到底(5)慮の及ぶ所ではございません。
かん・けん・すう・そく
たい・たく・ばん・ほん

(五) 次の傍線部分のカタカナを漢字で記せ。(40)

- 1 吉日リヨウシンを選んで挙式する。
2 亡妻の面影が眼前にヨウエイする。
3 うわの空でアイツチを打っていた。
4 師の戒めを心にロウキして忘れない。
5 キンジュウすら恩を知っている。
6 大衆のケイモウを目的に著された。
7 タンスから一張羅の晴れ着を取り出す。
8 香港はカキヨウ経済の中心地だった。
9 陽暦では四年毎にウルウドシが来る。
10 トシガイもなく若い娘に恋をする。
11 高いレンガ塀が敷地を囲んでいる。
12 唯偏にごカンジヨを請う次第です。
13 軽やかなバテイの響きが近づいてくる。
14 街談コウセツの類に惑わされていた。
15 保険のヤツカンに逐一目を通す。
16 世に超然としてココウを持する。
17 間一髪でココウを脱し命拾いした。
18 日雇いの港湾労働でココウを凌ぐ。
19 山ビルが足に吸い付いていた。
20 野ビルを摘んで食膳に添える。

準1級

解答欄を間違えないよう設問番号を確認してください。

(六) 次の各文にまちがって使われている同じ音訓の漢字が一字ある。上に誤字を、下に正しい漢字を記せ。

1 書画骨董に現を抜かし家産を傾けたが消懲りもなく蒐集に血道を上げる。

2 両国が権制しあつて交渉が進捗せず懸案の和平協定は暗礁に乗り上げた。

3 林間に洪然の気を養い倦怠を癒やし鬱悶を開いて精神の爽快を恢復する。

4 諸侯の内一際容貌魁偉な大男で威風凛りを払う肝禄が自ら備わっていた。

5 老夫婦の間に点綿する濃やかな愛情は二人の鴛鴦の偶たるを窺知させる。

(七) 次の問1と問2の四字熟語について答えよ。(30)

問1

次の四字熟語の(1)~(10)に入る適切な語を後の□から選び漢字二字で記せ。(20)

- (1) 夕虚 甜言 (6)
(2) 同時 紫電 (7)
(3) 活剝 行住 (8)
(4) 兔耳 意気 (9)
(5) 為楽 筆耕 (10)

いっせん・えんもく・けんこう
けんでん・ざが・じゃくめつ
せいどん・そつたく・ちようえい
みつご

問2

次の1~5の解説・意味にあてはまる四字熟語を後の□から選び、その傍線部分だけの読みをひらがなで記せ。(10)

- 1 風流隠士の暮らし振り。
2 造作もなく打ち負かす。
3 人の善言をよく聞き入れる。
4 男子が志を立てる。
5 本末顛倒の業。

鎧袖一触・枳根灌枝・堯鼓舜木
輸攻墨守・枯木寒巖・梅妻鶴子
桑弧蓬矢・膏火自煎

(八) 次の1~5の対義語、6~10の類義語を後の□の中から選び、漢字で記せ。□の中の語は一度だけ使うこと。

対義語

類義語

- 1 晦日 6 吉兆
2 速断 7 遭遇
3 起工 8 窮乏
4 碇泊 9 天地
5 還俗 10 宿所

げきりよ・けんこん・さくじつ
しゆんせい・しょうずい・ちぎ
とんせい・ぱつびよう・ひつぱく
ほうちやく

(九) 次の故事・成語・諺のカタカナの部分を選択して漢字で記せ。(20)

- 1 コチヨウの夢。
2 キザンの志。
3 シンメイに横道無し。
4 ハクトウ新の如く、傾蓋故の如し。
5 錐のノウチュウに処るが若し。
6 開いた口へポタモチ。
7 ホウオウ群鶏と食を争わず。
8 ブンボウ牛羊を走らす。
9 イハツを継ぐ。
10 大山もギケツより崩る。

(十) 文章中の傍線(1~5)のカタカナを漢字に直し、波線(ア~コ)の漢字の読みをひらがなで記せ。(20)

A 思い掛けなき君が思いがけなくも『明治豪傑譚』に気節論まで添えて御ケイトウあらんとは真以て思いがけなく驚き入り候。何はさて、ありがたく受納仕り候。

『豪傑譚』は仰せの如く先頃中より『読売』紙上にて時たま閲覧仕りおり候。その頃よりこれが豪傑の行為にやと不審を抱き候角も不少、欣慕などと申す感情はさておき中には眉を蹙めて却走せんと欲する件も有之、昨日興味につれ読了候は聊かも感服敬服などと申す念慮より生じたる事に無之、編中人物の行為矯激極端にして殆ど狂縦の痕跡あるかを疑う位故、何となく好奇の念禁じがたく一部の天然滑稽戯を披覧する心地にて通過致し、さて巻を捲うてこれらの人物が如何に小生のシンシヨを攪動せしやとテイカン仕り候えば、寸毫も高尚だの優美だのと申す方向に導きし点無之、中には索隠行怪の余弊殆ど人をして嘔吐を催せしむる件も有之やに見受けられ候。

(夏目漱石 明治二十四年正岡子規宛書簡)

B 「愛慾之中。……窈窕冥冥。別離久長」嘗て学舎でG師に教わって切れ切れに諳んじている経文が聞こえると、心の騷擾は弥増した。暫くすると、圭一郎は被袈の襟に顔を埋め両方の拳を顛顛にあて、お勝手に朝餉の支度をしている千登世に聞こえぬよう声を噛み緊めてしくりしくり哭いていた。彼は奮然として起き直り、薄い敷き蒲団の上にかしこまって両手を膝の上にソコえ、なにがなし負けまいと下腹に力を罩めて反ね衝すような身構えをした。

そうした毎朝が、火の鞭を打ちつけられるような毎朝が、来る日も来る日もつづいた。G師は、ともかく一応別居して二人ともG師の信念を徹底的に聴き、その上で、うわずつたマツシヨウ的な興奮からでなしに、真に即く縁のものなら即き、離る縁のものなら離るべしというのであったが、しかし、長く尾を引くに違いない後に残る悔いを恐れる余裕よりも、二人の一日の生活は迫りに迫っていたのである。(嘉村礒多「崖の下」より)

氏名